

配付資料 1：神殿建設のために犠牲をささげる聖徒たち

ノーブーの聖徒たちは、ノーブー神殿を完成させるに当たって大きな犠牲を払いました。

教会員のルイーザ・バーズ・プラットは次のように振り返っています。



「わたしたちの手と心は、神殿の完成を速めることに向けられていました。釘やガラスの購入に充てられるようにと、姉妹たちはそれぞれ50セント差し出すことまで決意しました。徹底して儉約し、その額をためました。わたしは善意をもって、自分の献金をささげようと神殿の事務所へ向かいました。すると道中突然、誘惑が襲いかかったのです。わたしは立ち止まりました。家族は今、どれほど多くのものを必要としているだろうか、あのお金を使えば当面の必要は満たせるだろうなどと、あれこれ思い巡らせたのです。わたしはすぐさま誘惑を払いのけました。『1週間、パンくずしか食べられないとしても、このお金をささげよう』と自分に言い聞かせたのです。

わたしは急ぎ足で進み、お金を支払うと、ひそかな満足感に満たされつつ家路に就きました。次の朝、玄関近くに腰を下ろしていると、一人の兄弟が通り、1ドル銀貨を玄関マットに放り投げました。わたしは心から感謝しました。そうして店に行くと、ほんとうに必要としていたものを購入したのです。」(Louisa Barnes Pratt, in *The History of Louisa Barnes Pratt*, ed. S. George Ellsworth [1998], 72 - 73)

教会員のエリザベス・カービー・ヒュアードは次のように綴っています。

「手放すのに胸が痛むようなものは何も思い浮かびませんでした。そうです、他界した夫の残した時計を除いては……。わたしはノーブー神殿の建設費用の足しにと、その時計を差し出しました。そのほか取っておくこともできたものもすべて、また、手元に残っていたお金も一緒に、合わせて50ドル近くを献金しました。」(Elizabeth Kirby Heward, in Carol Cornwall Madsen, *In Their Own Words: Women and the Story of Nauvoo* [1994], 180)

教会指導者と神殿委員会は、資金不足により神殿建設が滞ることを度々懸念していました。ブリガム・ヤング大管長(1801 - 1877年)は後に、ジョセフ・トロントとの経験について語っています。トロントはイタリアからの船乗りで、1843年にバプテスマを受けていました。



「当時、わたしたちは神殿の建設にかなりの労力を割いており、働き手たちの食べ物にも事欠く状態でした。わたしは神殿にかかわる物資を管理していた委員会に、手持ちの小麦粉をすべて分配するなら、神はさらに祝福してくださると助言しました。委員会はそのとおりにしました。程なくすると、トロント兄弟がやって来て、金貨で2,500ドルを差し出しました。……わたしはビショップに言いました。『さあ、行って神殿で働く人々のために小麦粉を買ってください。もはや主を疑ってはなりません。わたしたちは必要なものを与えられるのです。』」(Brigham Young, in Wilford Woodruff, *Wilford Woodruff's Journal*, ed. Scott G. Kenney [1984], 5:19 - 20; spelling, capitalization, punctuation, and grammar standardized)

- こうした人々がノーブー神殿建設のために進んで多大な犠牲を払ったのはなぜだと思いますか。
- こうした話から、犠牲についてどのようなことを学べますか。